

〈研究ノート〉

独立型社会福祉士の セルフ・スーパービジョンに関する一考察

御 前 由 美 子*

Consideration of Supervision in the Practice of Independent Social Workers

Yumiko Misaki

要旨：人びとの生活が多様化、複雑化するなか、独立型社会福祉士の活動には期待が寄せられているものの、その認知度や社会的地位は依然として高いとは言い難い。このような状況を打開するためには、スーパービジョンを強化し、サービスの質を担保していくことが重要である。

しかし、これまで、独立型社会福祉士の実践に対するスーパービジョンについての議論はあまりなされてこなかった。このため、本稿では、スーパービジョン形態の整理をふまえ、独立型社会福祉士実践における支援ツールを用いたセルフ・スーパービジョンの意義について考察している。

Abstract： While the lives of people in general are getting diversified and complicated increasingly, the activities of independent social workers are having expectations. However, it is difficult to consider their degree of recognition and social status as high. To break through such situations, it is essential to strengthen the supervision and to secure the quality of their service. On the contrary, discussions about supervision in independent social workers' practice have hardly been done. Therefore, on the basis of sorted out supervision styles, this report considers the meaning of self-supervision by using a supervision-enhancing tool for the practice of independent social workers.

Key words： 独立型社会福祉士 independent social workers セルフ・スーパービジョン self-supervision 独立型社会福祉士スーパービジョン支援ツール supervision-enhancing tool for the practice of independent social workers

I はじめに

独立型社会福祉士は、「地域を基盤として独立した立場でソーシャルワークを実践する者」¹⁾であると日本社会福祉士会では定義されており、組織や機関に所属することなく実践を行っているソーシャルワーカーである。独立型社会福祉士は、組織に所属してははその制約のために行えないような実践も自由に行うことができるという自由裁量性を有しており、利用者のニーズに応じた柔軟的・即応的・創造的な支援を可能にする高い自律性を備えている²⁾。このようなことから、人々の生活が多様化、複雑化してきている世の中において、独立型社会福祉士の活動には期待が寄せられている。しかし、「自由裁量性の一方で、採算や経営、サービス提供の責任を

負っており、実践のジレンマが生じやすい³⁾ともされているのである。

ソーシャルワーカーの実践において、実践の質を担保するためにスーパービジョンが重要であるということは自明のことであり、スーパービジョンの重要性は、社会福祉士のみならず独立型社会福祉士についても同様であると考えている。しかし、これまでは独立型社会福祉士のスーパービジョンの形態や方法についての議論は、あまりなされてこなかった。そこで、本稿では、独立型社会福祉士のスーパービジョンにおける課題から、スーパービジョンに必要な条件を検討するとともに、スーパービジョンの形態について整理を行うことで、独立型社会福祉士のスーパービジョンの形態とその意義、方法についての考察を行うことにする。

受付日 2017. 5. 26 / 掲載決定日 2017. 11. 8

*関西福祉科学大学 社会福祉学部 講師

なお、本稿は、JSPS 科研費（基盤 C）に採択された「独立型社会福祉士の特性と現状にもとづくより効果的なスーパービジョン方法の開発」の研究成果における一部と位置付けたい。

II 独立型社会福祉士の課題

1. 社会的認知度、社会的評価、報酬の低さ

わが国における独立型社会福祉士の活動は 1980 年代後半からみられたが、人数が増加しはじめたのは、介護保険制度が施行され、日本社会福祉士会での成年後見人養成研修が開始された 2000 年以降のことである⁴⁾。日本社会福祉士会によると、2017 年 7 月における独立型社会福祉士名簿の登録者は 423 人であり⁵⁾、課題として、まず、社会的認知度の低さがあげられる。この認知度の低さは、開業臨床心理士に対する聞き取り調査の結果にも現れており⁶⁾、隣接職種である開業臨床心理士でさえも独立型社会福祉士の実践内容についてほとんど認識していないことが明らかになっている。

そして、社会的認知度の低さは、社会的評価や信用にも影響している。五百木孝行、小川幸裕によると、認知度・信用の低さを感じている独立型社会福祉士は 20% 以上であるとされ⁷⁾、水島正浩、高良麻子も専門職としての社会的評価が得られていないことや、社会的評価が極端に低いことを見出している^{8,9)}。そして、社会的認知度の低さによる社会的評価の低さのために、利用者からの信頼を獲得することが困難となり、社会福祉士がどのような資格で独立型社会福祉士にはどのようなことができるのかといった説明を始め、長い時間を費やしたうえで支援を開始することになる。このため、社会的評価の低さは、独立型社会福祉士の活動の特徴である即応的な支援を制限してしまうことになることと調査を行った小川も述べている¹⁰⁾。さらに、収入の確保に苦慮していることも多く¹¹⁾、その理由として、20% 以上が相談援助に対価を払うという社会的認識の弱いことをあげている¹²⁾。

わが国において、福祉に関する相談は、施設や機関で行うことがほとんどであった。このため、福祉の相談に報酬を支払うという感覚や文化は根付いてきておらず、弁護士や臨床心理士のように報酬を得るには難しい状況にある。このような結果、経済的基盤の不安定な独立型社会福祉士が多くなっている。

2. 実践におけるジレンマ

独立型社会福祉士が実践する中で感じている葛藤についての課題もある。

小川による調査では、資産が十分でない、あるいは資産の不明な利用者に対して、独立型社会福祉士側から報

酬を求めづらいつ感じている人や、報酬を得ること自体に抵抗を感じているという人もある¹³⁾。利用者に対して報酬を要求することについて、このようなジレンマを感じている人は少なくない。

また、実践においては、利用者の意思を確認することが困難な場合もある。そのような時には、家族の意向や自身の判断にもとづいて支援しなければならないという状況がうまれるため、利用者の意思に即した支援になっているのかというジレンマを感じることもある¹⁴⁾。

さらに、独立型社会福祉士は組織や機関に所属していないことから、実践に対する第三者からの評価を受けることがほとんどない。このため、評価を受けることなく実践を行っていること、あるいは、自己研鑽の機会を確保できない状況にもかかわらず支援をしていることにジレンマを抱いていることも判明している¹⁵⁾。

3. 専門性の不明瞭さ

多くの独立型社会福祉士は、経済的な基盤の不安定さをかかえており、これを少しでも補うために、ソーシャルワーク以外の活動や社会福祉士以外のさまざまな資格を用いた活動を行っていることも少なくない。ソーシャルワーク以外の活動として最も割合の多いのは、成年後見制度における後見活動であり¹⁶⁾、これは増加傾向にあるとされている¹⁷⁾。また、この他にも学校などでの講師活動を行っていたり、ケアマネジャーの資格を用いたケアプランの作成や介護福祉士の資格を用いた介護活動を行っていたり、これら複数の業務を行っていたりする場合もある。そして、これらの業務量を増やすことで経済的基盤への対応を試みている場合も多いとされている¹⁸⁾。

誤解があってはならないが、経済面を補うために、独立型社会福祉士がソーシャルワーク以外の活動や社会福祉士以外の資格を用いた活動を行うことに問題があるというわけではない。独立型社会福祉士が弁護士や司法書士、ケアマネジャーなどの他職種と同じような業務にのみ終始することに問題があると考えているのである。成年後見活動やケアプランの作成といった手続き的な活動は、独立型社会福祉士本来の活動とはいえない。本来の活動は、あくまでもソーシャルワークである。他職種と同じような業務を主な活動にすることは、本来の実践を見えづらくするとともに、その専門性を不明瞭にしてしまうことにつながる。そして、このような専門性を不明瞭にする活動によって、社会的認知度や社会的評価は一層高まらず、報酬も改善されないという悪循環に陥っていると考えられる。

Ⅲ 独立型社会福祉士のスーパービジョン

1. 独立型社会福祉士の課題とスーパービジョン

日本社会福祉士会では、社会的認知や社会的評価の低い状況を打開するために、「独立型社会福祉士名簿登録制度」が創設されている。これは、利用者が独立型社会福祉士にアクセスしやすくするとともに、実践の質を確保することを旨としたものであり、「援助を必要とする人々の生活と権利の擁護に寄与する」¹⁹⁾ことを理念として掲げている。しかしこれは、独立型社会福祉士のみならずソーシャルワーカーに共通する理念でもある。独立型社会福祉士は、独立開業をしているソーシャルワーカーであり、ソーシャルワークの実践者であることに変わりはない。したがって、独立開業をしているか否かにかかわらず、利用者の生活と権利を擁護し、生活を包括・統合的に支援することがソーシャルワーカーの本来の実践活動であり、この実践過程に専門性を見出すことができるのである。

独立型社会福祉士がこの理念を達成するとともに、高度専門職実践としてのソーシャルワークを行っていくためには、課題である低い社会的認知度、社会的評価、報酬、専門性の不明瞭さといった悪循環を断ち切らなければならない。そのためには、実践の質をどのようにして確保していくかについて早急に検討していく必要があり、先述の独立型社会福祉士自身のジレンマを軽減するためにも必要なのが、スーパービジョンであると考えている。

スーパービジョンは、福祉サービスの展開に不可欠の機能であり、特別な意味を持つとされ²⁰⁾、歴史的にも他職業と比較してソーシャルワーカーにとって、重要なものとされてきた²¹⁾。特に、独立型社会福祉士の場合、自身のパーソナリティや価値観が活動に反映されやすいことを自覚していなければならないのである²²⁾。機関や組織に所属しては実現できない多様で固有なサービスを提供するという独立型社会福祉士の役割やその活動への期待が大きいからこそ、これに対する専門性を維持する必要があり、このために、スーパービジョンは不可欠である²³⁾。また、そのスーパービジョンには期待も寄せられているのである²⁴⁾。

2. 独立型社会福祉士のスーパービジョンにおける課題

ソーシャルワーカーが、所属する組織の外でスーパービジョンを受ける場合、その参加に影響を及ぼす要因として、時間の長さ、開催場所、参加費、研修内容があるとされている²⁵⁾。組織に所属しない独立型社会福祉士がスーパービジョンを受ける場合も、このような職場外で

のスーパービジョンに近い状況になると考えられる。そこで、独立型社会福祉士がスーパービジョンを受けるにあたり、影響を及ぼすとされているこれらの要因について、検討を行うことにする。

①実施場所

スーパービジョン研修は、日本社会福祉士会や都道府県社会福祉士会によって行われており、日本社会福祉士会による研修会は、東京、大阪、福岡といった都市部で、また、都道府県社会福祉士会による研修会は、県庁所在地や当道府県の主要都市で開催されることが多い。

しかし、その活動地域を人口規模で見ると、10万人未満の地域での活動が4割強であり、その内、5万人未満の地域での活動は、約15%である²⁶⁾。中には、山間部などで活動を行っている場合もある。日本社会福祉士会において、独立型社会福祉士は「地域を基盤として独立した立場でソーシャルワークを実践する者」²⁷⁾と定義されているように、地域に根ざした活動を行うために独立開業した人が20%以上(2012年)を占めている²⁸⁾。これは、2007年においては約13%であったのに対して増加しており、彼らの活動は一層、地域に密着したものになっていることがうかがえる。

このようなことから、活動している地域によっては、研修が開催される場所までのアクセスが悪く、研修の参加に困難な場合も多いと考えられる。

②実施時間

独立型社会福祉士の活動は多岐にわたり、事業形態においても活動に応じて個人事務所、株式会社、NPO法人、合同会社、共同事務所といった多様な形をとっている。その中で、柔軟性、即応性、裁量性を発揮しやすい単独開業は65%以上を占めており、これは2007年の53%よりも増加している²⁹⁾。しかし、裁量性などを発揮しやすい反面、1週間に50時間を超えて稼働している人が20%弱あるが³⁰⁾、60%以上が「自分以外に業務を代わってもらえる人がいない」という課題を抱えている³¹⁾。しかし、代わってもらえる人がいないという課題を抱えているのは、単独開業にかかわらず、どの事業形態においても同様である。これは、成年後見活動や個人との契約による活動では、自分の代わりを他人にまかせることで、利用者との信頼関係に影響を及ぼす場合もあると考えられるからである。このようなことから、スーパービジョンのための時間を確保することは、独立型社会福祉士にとって容易ではない場合が多い。

③総合的費用

スーパービジョンを受けるにあたっては、費用も発生する。しかし、独立型社会福祉士の半数以上が年収200万円未満であり、このうち36%以上は年収100万円未

満である³²⁾。独立型社会福祉士の名簿登録要件とされている認定社会福祉士認定のためのスーパービジョン研修会への参加費用は 2 万円前後であることが多い。また、個人開業の場合、事務所を自宅においていることが多いため³³⁾、開催される都市部までの交通費も含めると、年収の低い独立型社会福祉士にとって、費用の負担感は大いであろう。

④研修内容

独立型社会福祉士を対象とした研修では、独立開業にかかわる経営に関するものと利用者への実践に関するものが行われている。

経営に関するものでは、集客のための広報や収支、税金といった運営継続や展開にかかわることについての研修が行われている。また、実践に関しては、利用者支援の事例にもとづき、スーパーバイザーによる助言や指導が行われ、その際には、逐語録による実践記録や録音などを用いてスーパービジョンが行われている。

しかし、これらは別々に行われているため、利用者支援という本来の活動と経営のバランス³⁴⁾を検討する機会は得られていないというのが現状である。

3. 独立型社会福祉士のスーパービジョンに必要な条件

スーパービジョンは、継続的に実施されてこそ実践の質を保障する有効な手段となる。そこで、前述したような独立型社会福祉士がスーパービジョン研修に参加するにあたって影響を及ぼす要因から、研修への参加を困難にしている物理的な要因についてとりあげてみると、①実施場所、②実施時間、③総合的費用がこれにあたりと考えられる。このことから、研修へ参加し、継続的なスーパービジョンを実施するための条件としては、以下をあげることができるであろう。

①場所設定の柔軟性

様々な地域で活動を行う独立型社会福祉士にとって、スーパービジョンの実施場所は、都市部や主要都市に限らず、身近で参加しやすい場所やアクセスのよい場所を選択できることが必要である。したがって、実施場所の設定には柔軟性のあることが条件となる。

②時間設定の柔軟性

個人開業の多い独立型社会福祉士にとって、他の人と調整して業務を行うことは困難である。このため、自分の活動の状況に応じて、スーパービジョンの開始時刻や時間の長さを設定できる柔軟性も条件として必要である。

③総合的費用の低廉性

スーパービジョンは継続して実施されなければ意味がない。しかし、スーパービジョンに費用をかける余裕の

ない独立型社会福祉士が多いと考えられる現状において、スーパービジョンの実施にかかる費用、さらに、実施場所への往復にかかる交通費などをあわせた費用は安価であるか、あるいは、ほとんど無料に近いということが必要となる。

IV 独立型社会福祉士実践とセルフ・スーパービジョン

1. スーパービジョンの形態

独立型社会福祉士にとって、スーパービジョンの実施には物理的な制約があることから、スーパービジョンの形態について、整理をしておきたい。

スーパービジョンは、個人スーパービジョンとグループ・スーパービジョンに大きく分けられる。

個人スーパービジョンは、スーパーバイザーとスーパーバイザーが対面でスーパービジョンを行う、スーパービジョンの中で最も基本的な形態である。これには、時間と場所をあらかじめ設定したうえで行う構造化面接、職場や組織内で上司や先輩に状況説明を中心に短時間で行われる生活場面面接と呼ばれるものがある³⁵⁾。

グループ・スーパービジョンは、グループに対してスーパーバイザーがスーパービジョンを行うものであり、ケースカンファレンスや研修会に用いられることが多い³⁶⁾。

また、事例の記録などを用いたスーパービジョンが多いのに対し、面接時の録音やビデオを用いて、あるいは、その場にスーパーバイザーが同席してスーパービジョンを行うものは、ライブ・スーパービジョンとよばれる³⁷⁾。

個人スーパービジョン、グループ・スーパービジョン、ライブ・スーパービジョンは、スーパーバイザーの存在を必要とするのに対し、スーパーバイザーを含まずに行われるものに、ピア・スーパービジョンとセルフ・スーパービジョンがある³⁸⁾。

ピア・スーパービジョンは、同僚間で討議する形で行われるものであり、自主的に勉強しているグループに用いられることが多い³⁹⁾。

そして、セルフ・スーパービジョンは、自分自身で確認作業、自己点検・評価を行うものである。

2. 継続的なスーパービジョンとスーパービジョンの形態

スーパービジョンの形態において、ピア・スーパービジョンとセルフ・スーパービジョンに関しては、専門誌で多く取り上げられることはなかったとされる⁴⁰⁾。また、これらは、スーパーバイザーを必要とせず、スーパーバイザーからの客観的なアドバイスやスーパーバイザ

表1 継続的なスーパービジョンの条件とスーパービジョン形態

スーパービジョン形態 継続的なスーパー ビジョンのための条件	個人 スーパービジョン	グループ・ スーパービジョン	ライブ・ スーパービジョン	ピア・ スーパービジョン	セルフ・ スーパービジョン
①場所設定の柔軟性	×	×	×	△	○
②時間設定の柔軟性	×	×	×	△	○
③総合的費用の低廉性	×	×	×	△	○

ーとスーパーバイザーによる相互関係が得られないため、スーパービジョンにあたらなければならないかとする意見のあることも承知している。しかし、スーパーバイザーの人数が不足しているという日本の現状を鑑みると、これらは、有効な形態のスーパービジョンであるという意見のあることも事実である⁴¹⁾。また、セルフ・スーパービジョンについては、別の場所で良質なスーパービジョンを受けている場合でも実施することを推奨しているものや⁴²⁾、独立型社会福祉士ならではの役割を担うことを可能にする要因として、セルフ・スーパービジョンの力をあげているものもある⁴³⁾。現実には、個人的価値やパーソナリティの影響を認識している独立型社会福祉士のなかには、自らの実践に対する振り返りや評価を行っていることが確認されている⁴⁴⁾。このようなことから、本稿においてもピア・スーパービジョンとセルフ・スーパービジョンをスーパービジョンとして位置づけ、考察を行いたい。

独立型社会福祉士のスーパービジョンにおいて、実施場所や実施時間の柔軟な設定が可能であるか、また、総合的費用が低廉であるか否かについては、スーパーバイザーの有無が大きな要因となる。

まず、個人スーパービジョンでは、スーパーバイザーによってスーパービジョンが行われる。スーパーバイザーの人数も限られているため、研修が開かれる場所や時間が限定されることから、これらにおける柔軟性は低いといえる。また、参加費用や交通費も含めた総合的な費用も安価とはいえない場合が多い。グループ・スーパービジョン、ライブ・スーパービジョンにおいても、同様である。

これらに対し、ピア・スーパービジョンでは、実施場所や時間を参加者同士で設定できることから、個人スーパービジョン、グループ・スーパービジョン、ライブ・スーパービジョンに比べて、場所や時間についての柔軟性は高い。しかし、先述したように、単独で活動を行っている独立型社会福祉士にとって、業務の交代は難しい。ピア・スーパービジョンの実施には、業務を交代してもらえない参加者の仕事の合間をぬって、予定をあわせることになる。このため、場所や時間設定についての柔軟性はあるものの、実際にはどの程度の頻度で実施する

ことができるかは、参加者次第である。また、実施にあたっては、同じような価値観や事業規模での活動を行っている独立型社会福祉士同士の参加によって実施されるのが望ましいと考えられる。しかし、参加者同士の住まいに距離がある場合、実施にかかる費用は発生しないが、実施場所までの交通費が安価であるとは限らない。したがって、費用の低廉性においても場所や時間と同様、参加者次第であるといえる。

最後に、セルフ・スーパービジョンである。これについては、自分自身の活動に応じて場所や時間を設定することができるうえに、スーパービジョン研修への参加費用や交通費などの費用も一切かからない。

独立型社会福祉士がスーパービジョンを継続して行うための必要な条件として明らかになった①場所設定の柔軟性、②時間設定の柔軟性、③総合的費用の低廉性について、スーパービジョンの形態別に整理したものが、表1である。

3. 独立型社会福祉士にとってのセルフ・スーパービジョンの意義と課題

独立型社会福祉士にとって、スーパーバイザーの必要な個人スーパービジョン、グループ・スーパービジョン、ライブ・スーパービジョンを実施することには困難を伴うことが多い。また、スーパーバイザーを必要としないピア・スーパービジョンにおいては、現実的に実施可能な場合とそうでない場合がある。

そこで提案したいのが、セルフ・スーパービジョンの活用である。セルフ・スーパービジョンでは、スーパーバイザーを必要としないことから、スーパーバイザーとの契約や研修への参加の必要がないため、費用も一切かからないうえに、自由な場所や時間に実施できる。しかしこれは、日本のスーパーバイザー数や研修開催の状況、独立型社会福祉士の現状を鑑み、セルフ・スーパービジョン以外にはスーパービジョンの実施が困難であるという物理的な面からの消去法的で消極的な意義にすぎない。

独立型社会福祉士にとって、機関に所属しては行うことができない活動も可能になるという自由裁量性が最も大きな特徴である。しかし、一方で、実践がそうな

る危険性もはらんでいるように、セルフ・スーパービジョンの評価においても独善的な、あるいは、自身の価値観にもとづく偏向したものになりかねない。独立型社会福祉士は高度専門職である。消去法的、消極的な意義でのスーパービジョンを実施しているようでは、実践の質を保障し、社会的地位を高めていくことには必ずしもつながらないと考えている。高度専門職としての実践の質をセルフ・スーパービジョンによって担保するためには、客観的、かつ、科学的な方法で実施されること、さらに、その内容は、独立型社会福祉士の実践に即したものにしていなければならない。

V 包括・統合的かつ科学的な独立型社会福祉士のセルフ・スーパービジョン

1. 独立型社会福祉士に特化したセルフ・スーパービジョンの方法

独立型社会福祉士スーパービジョンにおける最後の課題である研修内容について、検討を行うことにする。

セルフ・スーパービジョンでは、客観的な視点での評価を目指し、ワークシートで実践を振り返ったうえで自己評価を行うチェックシートなどのツールが開発されている⁴⁵⁾。

しかし、これらは、機関や施設に所属するソーシャルワーカー、あるいは、地域包括支援センターのソーシャルワーカーを対象としたものである。利用者に対する実践については、独立型社会福祉士もこのようなツールやこれらの一部を用いてセルフ・スーパービジョンを行うことは可能であろう。しかし、独立型社会福祉士の活動の大きな要素は、「実践」と「経営」であるため、これら両方について、さらに、これらのバランスについてのセルフ・スーパービジョンも必要となる。

独立型社会福祉士は、「志と情熱」をもって活動を行っており⁴⁶⁾、開業理由として組織における役割に制限されずに活動することをあげているのはもちろんであるが、1割以上が「定年退職後の地域貢献」をあげているのである。そして、地域貢献を目的として活動を行っている人では60歳代が最も多く⁴⁷⁾、60歳代の数は、2007年の22.6%に対し、2012年には32.8%に増加している⁴⁸⁾。このような人たちにとって、自分の理想とする支援をすることが最優先課題であり、報酬についてはあまり重要視していない場合もある。経済的な面は年金で賄ってでも自分の思い描く実践を行いたいと考える場合、あるいは、経営面でしっかりと成り立たせたいという場合など、それぞれの思いがあるのである。このようなことから、独立型社会福祉士の実践では、利用者支援という本来の活動と経

営とのバランスが重要となるのである。したがって、独立型社会福祉士のスーパービジョンでは、「実践」と「経営」に加え、「実践と経営のバランス」について包括・統合的に評価できることが必要となる。

さらに、これらに加え、実践・経営の状況が時間の経過とともにどのように変化してきているのかをとらえていく必要もある。これは、現在の実践が開業した当時の思いに沿った実践、あるいは、それに向かった実践となっているか、逆に、思いとは異なる実践に偏向してきてはいないかといった活動の変容をとらえ、そのプロセスを考える必要があるからである。

2. 独立型社会福祉士スーパービジョン支援ツール

現在の実践と経営の状況、そして、これらのバランスを視覚化して俯瞰的、客観的に把握するとともに、その変化の様子をとらえることも可能にするために、これまで、支援ツール（「独立型社会福祉士スーパービジョン支援ツール」と称している）を開発してきた。これは、太田義弘が提唱するエコシステム構想によるコンピュータを用いた支援ツールであるエコスカナーを援用したものである。これについては、新しくエコスカナー2015 Ver.1.00が開発されており、これに独立型社会福祉士のミクロからマクロまでを視野に入れた実践特性を組み込んでいる。その内容を示したものが、図1である。なお、この支援ツールの構成子に組み込んでいる実践特性の選定方法や経緯については、すでに報告済みであるため⁴⁹⁾、本稿では割愛することにする。

本支援ツールでは、ある項目をクリックすると図2のような質問項目画面が現れ、まず、これに答えていく。すると、2層、3層、4層、各構成子についてのデータをグラフとして可視化することができる。図3は2層の「経営」と「実践」について棒グラフで、また、図4は3層の「事業展開」「事業継続」「価値・方法」「知識・方策」について、図5は4層の「事業内容」「成果実績」「評価」「専門性」「価値倫理」「方法」「知識」「方策」について、さらに、図6は、それぞれの構成子についてリーダーチャートで例を示したものである。

また、本支援ツールでは、これらのデータを積み重ねていくことが可能であることから、1回目、2回目と回を重ねるごとに自分の活動がどのように変化してきているのかを見ることも可能となっている。

3. 独立型社会福祉士のセルフ・スーパービジョンの意義

チェックシートを用いた従来の方法でのセルフ・スーパービジョンは、独立型社会福祉士にとっては物理的な要因を克服するための消極的な意義にとどまっていた。

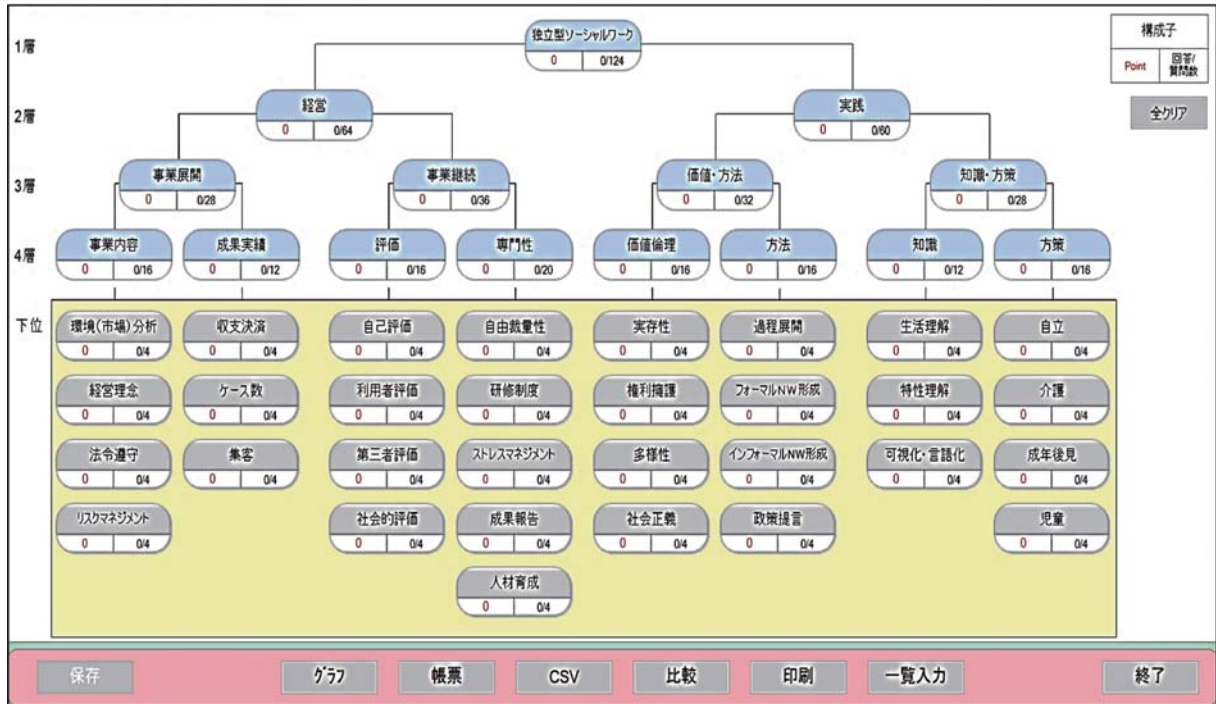


図1 独立型社会福祉士スーパービジョン支援ツール

アセスメント入力											
環境(市場)分析		0/4									
質問	回答	回答	回答	回答	回答	回答	回答	回答	回答	回答	
質問1	地域社会のニーズに関心がありますか	まったく	<>	あまり	<>	普通	<>	ある程度	<>	とても	未回答
質問2	地域社会のニーズを把握していますか	まったく	<>	あまり	<>	普通	<>	ある程度	<>	とても	未回答
質問3	地域社会のニーズを一層把握するための手立てがありますか	まったく	<>	あまり	<>	普通	<>	ある程度	<>	とても	未回答
質問4	地域社会のニーズを一層把握するための工夫をしていますか	まったく	<>	あまり	<>	普通	<>	ある程度	<>	とても	未回答
メモ											

図2 質問項目画面

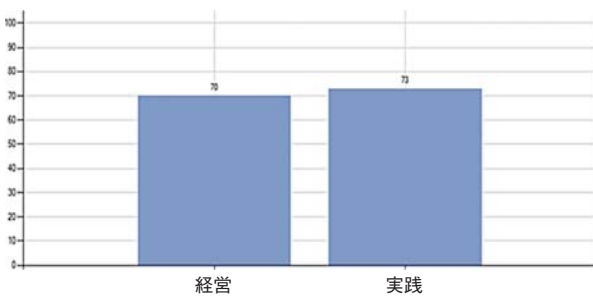


図3 2層の棒グラフ

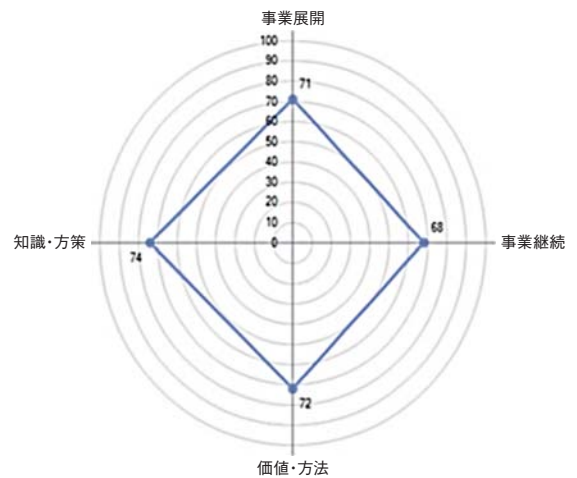


図4 3層のレーダーチャート

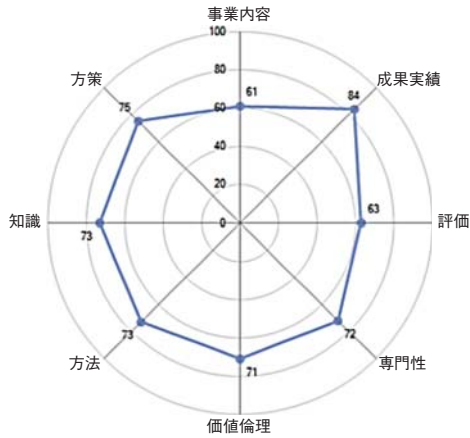


図 5 4 層のレーダーチャート

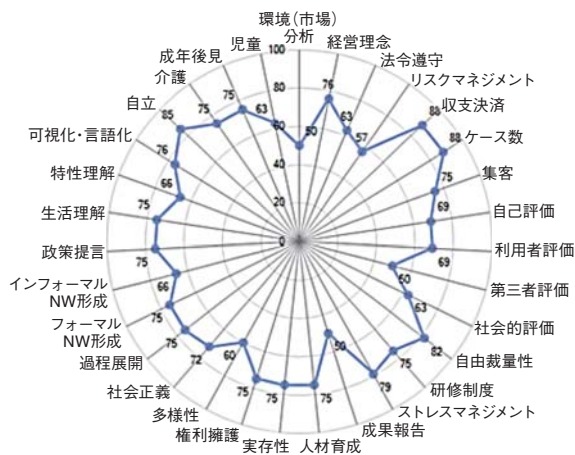


図 6 各構成子のレーダーチャート

しかし、独立型社会福祉士に特化したスーパービジョン支援ツールを活用することで、経営と実践それぞれの構成子に入力したデータにもとづき、グラフによって視覚化されたものに対して、客観的に振り返りを行うことができる。そして、画面を切り替えることで、それらのバランスが自分の思い描いたものとなっているか、あるいは、それに近づいているかといったことも考察できる。さらに、スーパービジョンのデータを蓄積していくことも可能であることから、回を重ねることで自身の活動がどのように変化してきているかを把握し、課題の発見や今後の活動につなげていくこともできるのである。したがって、独立型社会福祉士のセルフ・スーパービジョンは、独立型社会福祉士スーパービジョン支援ツールを用いることで、包括・総合的、かつ、科学的な方法となり、積極的な意義をもつことになる。

VI おわりに

独立型社会福祉士は、機関に属さないからこそ地域のニーズに応えること、そして、ジェネラルなソーシャルワーク実践の展開が可能となる。しかし、その活動や事

業形態は様々であるため、従来のようなセルフ・スーパービジョンではスーパービジョンに必要な枠組みを設定しづらく、セルフ・スーパービジョンを積極的にとりいれることはされてこなかった。

しかし、ミクロのみならずマクロまでを視野に入れた活動を俯瞰的、客観的に振り返ることのできる独立型社会福祉士スーパービジョン支援ツールを活用することで、セルフ・スーパービジョンが独立型社会福祉士にとって、物理的にも内容的にも最も適したスーパービジョンになることを主張してきた。

現在は、この支援ツールを用い、独立型社会福祉士を対象としたセルフ・スーパービジョンの実証研究を行っているところである。また、高良麻子は、独立型社会福祉士の役割をはたすことを可能にする要因として、セルフ・スーパービジョン力に加え、仲間の存在もあげていることから⁵⁰⁾、支援ツールを活用し、離れた場所にいる社会福祉士同士がインターネットでつながることで、セルフ・スーパービジョンをふまえたピア・スーパービジョンの実施も可能になるのではないかと考えている。

今後は、実証研究を積み重ねることを通して独立型社会福祉士のスーパービジョン方法を構築していきたい。

注

- 1) 公益社団法人 日本社会福祉士会 HP (2017年5月15日) http://jacsw.or.jp/17_dokuritsu/index.html
- 2) 小川幸裕「自律性の確保を契機としたソーシャルワーク課題の再形成と実践観形成プロセスの検討 -独立型社会福祉士の実践から」『弘前学院大学社会福祉学部研究紀要』第12号、2012年、9頁
- 3) 太田義弘・安井理夫・小築住まゆ子「高度専門職業としてのソーシャルワーク実践の役割と課題」『関西福祉科学大学紀要』第13号、2009年、9頁
- 4) 小川幸裕「独立型社会福祉士の事業形態にみる実践と課題」『弘前学院大学紀要』第13号、2013年、4頁
- 5) 公益社団法人 日本社会福祉士会 HP (2017年8月20日) http://jacsw.or.jp/17_dokuritsu/index.html
- 6) 小築住まゆ子「独立型社会福祉士の開業システム構築に向けた研究 -開業臨床心理士へのインタビュー調査を通じて-」『同朋福祉』第19号、2013年
- 7) 五百木孝行「地域社会における独立型社会福祉士の存立基盤の可能性と創造」『法学研究』第12号、2010年、118頁
- 8) 水島正浩「独立型社会福祉士の活動に関する研究」『日米高齢者保健福祉学会誌』第2号、2007年、220頁
- 9) 高良麻子「独立型社会福祉士の独自性と課題 -独立型および既存組織所属社会福祉士に対する調査結果から-」『東京学芸大学紀要』第61号、2010年、203-213頁
- 10) 小川幸裕「独立型社会福祉士の課題と対応」高良麻子編著『独立型社会福祉士 -排除された人びとへの支援を目指

- して』ミネルヴァ書房、2014年、48頁
- 11) 小川幸裕「狭間課題への対応と対価確保のジレンマ形成に関する実証的研究－独立型社会福祉士の活動を通して」『北海道地域福祉研究』第15号、2012年、47頁
 - 12) 前掲書10、50頁
 - 13) 同書、57頁
 - 14) 同書、57頁
 - 15) 同書、57頁
 - 16) 長澤真由子「独立型社会福祉士の現状」『広島国際大学医療福祉学科紀要』第8号、2012年、98頁
 - 17) 前掲論文4、7頁
 - 18) 前掲書10、57頁
 - 19) 公益社団法人 日本社会福祉士会 HP 2017年5月15日
 - 20) 窪田暁子「社会福祉実践におけるスーパービジョンの課題」『月刊福祉』1997年第80巻10号、1997年、14頁
 - 21) A. Kadushin and D. Harkness, *Supervision in Social Work*, 5th ed., Columbia University Press, 2014, p.20.
 - 22) 前掲論文2、9頁
 - 23) 御前由美子「独立開業とスーパービジョン」太田義弘・中村佐織・安井理夫編著『高度専門職業としてのソーシャルワーク－理論・構想・方法・実践の科学的統合化』光生館、2017年、153頁
 - 24) 加藤由衣「自己点検と評価」太田義弘・中村佐織・安井理夫編著『高度専門職業としてのソーシャルワーク－理論・構想・方法・実践の科学的統合化』光生館、2017年、147頁
 - 25) 福山和女『ソーシャルワークのスーパービジョン－人の理解の探究』ミネルヴァ書房、2013年、240頁
 - 26) 前掲書10、32頁
 - 27) 公益社団法人 日本社会福祉士会 HP (2017年5月15日) http://jacsw.or.jp/17_dokuritsu/index.html
 - 28) 前掲書10、33頁
 - 29) 前掲書10、35頁
 - 30) 小柴住まゆ子他『平成22、23、25年度 科学研究費補助金 基盤研究C ソーシャルワークの固有性にねざした独立型社会福祉士の開業システムの構築 報告書』2014年、24頁
 - 31) 小川幸裕「独立型社会福祉士の課題と対応」高良麻子編著『独立型社会福祉士－排除された人びとへの支援を目指して』ミネルヴァ書房、2014年、55頁
 - 32) 前掲論文16、96頁
 - 33) 高良麻子「独立型社会福祉士の特徴と役割」高良麻子編著『独立型社会福祉士－排除された人びとへの支援を目指して』ミネルヴァ書房、2014年、76頁
 - 34) 前掲書31、62頁
 - 35) 植田寿之『対人援助のスーパービジョン－よりよい援助関係を築くために』中央法規出版、2011年、63頁
 - 36) 同書、65頁
 - 37) 同書、67頁
 - 38) 同書、68頁
 - 39) 同書、69頁
 - 40) J. Bernard and R. Goodyear, *Fundamentals of Clinical Supervision*, 4th ed., Upper Saddle River, 2009, p.290.
 - 41) 前掲書35、68-70頁
 - 42) P. Hawkins and R. Shohet, *Supervision in the Helping Professions* 4th ed., Open University Press, 2012, pp.43-44.
 - 43) 前掲書33、94頁
 - 44) 小川幸裕「自律性の確保を契機としたソーシャルワーク課題の再形成と実践観形成プロセスの検討－独立型社会福祉士の実践から」『弘前学院大学社会福祉学部研究紀要』第12号、2012年、9頁
 - 45) たとえば、以下のようなものがある。
 - ・福山和女編著『ソーシャルワークのスーパービジョン－人の理解の探究』ミネルヴァ書房、2013年
 - ・社団法人日本社会福祉士会『自己評価ワークブック』2009年
 - ・南彩子・武田加代子『ソーシャルワーク専門性 自己評価』相川書房、2004年
 - 46) 前掲書33、94頁
 - 47) 前掲論文16、98頁
 - 48) 前掲書10、25頁
 - 49) 御前由美子「独立型社会福祉士のためのスーパービジョン支援ツールの開発」『信愛紀要』第56号、2016年、1-10頁
 - 50) 前掲書33、94頁